

純文学と大衆文学

首藤 静夫

当会の「何でも読もう会」で、昭和二十年〜三十年頃の芥川賞作品を読んで来た。一段落した今、直木賞作品に取り組んでいる。

かつて、芥川賞は純文学系、直木賞は大衆小説系と言われてきた。ネーミングからして純文学の方が上等な感じがするが、どうなのだろう。さらには戦後すぐ、両者の間に「中間小説」も登場、横光利一や石坂洋次郎などが推進したようで、こうなると素人は訳が分らない。

似た話だが、昭和の初期に「芥川・谷崎文学論争」があったそうだ。「話の筋の面白さ」物語の組み立て」を重視し、『源氏物語』をその代表とする谷崎に対し、芥川は「話らしい話のない小説がその価値を定める」として志賀直哉の『焚火』を挙げた。最も詩に近い小説と彼はいう。

調べるうちにある評論に出会った。日本文学はそもそも「日記文学」と「物語文学」の二つの伝統があり、日記文学を継いでいるのが明治以降の私小説で、これが純文学の流れだという。一般人に読ませるのが目的でないから故意に面白くないし、その代わり文体・表現を自分が入るまでストイックに追求した。芥川が主張するのはこれに近いだろう。物語文学の方は、言うまでもなく話の筋、構成が命である。ただ物語系は、例えば『細雪』のような、純文学系と見なされるものや『大菩薩峠』のような大衆小説と幅が広い。二人は二つの川の別の舟に乗り、叫び合っていたようだ。

二人の共通点は日本語に対する執念、あくなき追求である。自分の言葉にこだわり、表現力の確立に努めた。志賀にしる、この二人にしる、作者名がなくても誰のものが想像できそうだ。私たちが今日書き慣れている文章は彼ら先人の奮闘のお陰と云える。ところで、ある評論によるとあの名文家の太宰治は自分の努力なしに先人の文章力をもものにしてしまったと辛口だった。太宰の時代にはすでに今の口語文体が確立されていたものと思われる。

私達「書こう会」も言葉を大事にして書いていきたい。